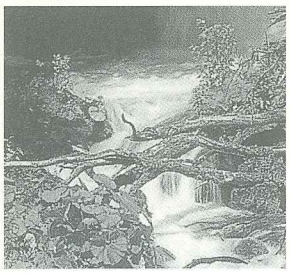
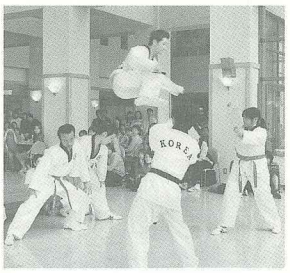
APU

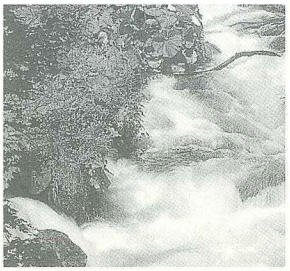
[季刊] 立命館アジア太平洋大学プログレス・レポート　2001年

立命館アジア太平洋大学

PROGRESS REPORT







vol.16
SUMMER 2001

変即不変

日本電気株式会社 相談役
関本 忠弘

「万物は流転する」「今日の川は昨日の川に似て昨日の川にあらず」とはギリシャの哲人ヘラクレートスが約二五〇〇年以前に述べた言葉である。私が今さら言うまでもなく全ての森羅万象は変化している。特に最近の「情報技術」の大進歩によって、その変化は予想を上まわって、早く激しく怒濤のごとき様相を呈している。また、その変化は国境を越え、さらには、地球の枠を越え宇宙空間にまで及ぶ時代がやって来た。かかる環境の中で我等、如何に生きるべきか、正に人間の知恵が問われているのである。

先ず最初に言えることは、それぞれの国の持つ固有の歴史と文化を十分に把握しつつ、かつその変化の方向性を全地球的な立場でとらえることである。国際的な変

化の流れと、それぞれの国が時間をかけて培ってきた固有の文化とを如何に上手に止揚して変化させてゆくかが今まさに求められているのである。

如何なる時代といえども国々が協力してゆくためには、それぞれの慣習文化を相互に尊敬し合うことが必要である。すなわち、個（ON：ギリシャ語）を尊敬し合わねばならぬ。

一方、地球的規模での情報を交換し合うことによって、全体（HOLOS：ギリシャ語）がより多くの情報を共有せねばならぬ。すなわち、ONとHOLOSという相対立する概念を踏まえながら、それを止揚するところに全体子（HOLON：ギリシャ語）の概念が生まれてくる。別の言葉で言えばHOLONIC APPROACHが求められるのである。そのためには、第一に「情報の共有」に努めねばならぬとともに、一方、全ての人々が共通に崇め見る理想の旗が不可欠なのである。「平和」もその候補の一つであろう。そして、その内容も二十一世紀の進展と相俟って変化してゆくべきものなのである。しかし、ここで強調しておきたいことは、その場合といえども、変化の中に不変を見、不変の中に変化を読み取る「変即不変」こそが、今、我々に求められている基本原則なのではあるまいか。

拡がり、深まる

APUの国際ネットワーク

January-June 2001

APUは、積極的に大学間協定の締結や交流のために海外の大学・機関を訪問しています。
また、APUへたくさんの海外からの要人の方々をお迎えしています。
アドバイザリー・コミッティのアンバサダー・メンバーには、新たに8名の方にご就任いただきました。

APUからの訪問

二月三日～六日
アジア・マネジメント大学（AIM）との協定協議および
ユーチェンコ・グループ・プラザ竣工式出席（フィリピン）
〈坂本学長〉

二月二五日～三月一日
ハーバード大学ビジネス・スクール　吉野洋太郎教授および
同アジアセンター　エズラ・F・ボーゲル教授訪問（アメリカ合衆国）
デポール大学との協定締結式（アメリカ合衆国）
〈坂本学長、久原アジア太平洋マネジメント学部教授〉

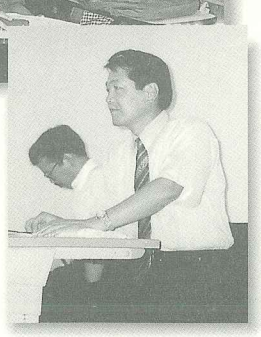
三月一六日～二四日
アル・イザール高校との協定締結式（インドネシア）
〈坂本学長、木村学生部長〉

四月七日～一〇日
上海交通大学との協定調印式（中国）
〈坂本学長、仲上教学部長〉

四月一二日～一四日
日韓経済人会議（韓国）
〈坂本学長、伊藤副学長〉

五月一六日～一九日
東北財経大学とのデュアル・ディグリー制度協定調印式（中国）
〈坂本学長、慈道副学長〉

五月三〇日～六月三日
ガジャマダ大学で講演（インドネシア）
〈木村学生部長〉



5/31
ガジャマダ大学で講演中の木村教授

4/9　上海交通大学との協定調印式

APUを訪問された主な方々

- 二月　二日　ブンタビー・インシーシェンマイ　ラオス教育省官房長
- 二月二三日　アフタブ・セット　駐日インド大使、ヨゲシュワル・ヴァルマ　インド在大阪総領事
- 三月　二日　タノン・ビダヤ　タイ王国元大蔵大臣
- 四月一一日　劉毅　在福岡中国総領事
- 四月一八日　スハルダニ・アリフィン　アル・イザール高校理事長（インドネシア）
- 四月二三日　ジョシアン・シモン　在福岡カナダ領事
- 四月二五日　サムエル・クー　ユニセフ駐日事務所所長
- 五月一一日　アール・アレクサンダー・カー　駐日ジャマイカ大使
- 五月二〇・二一日　黄明朗　台北駐大阪経済文化辦事處福岡分處處長
- 五月三一日　原晃　サモア国立大学学長補佐
- 六月　五日　カレル・ジェブラコフスキー　駐日チェコ共和国大使
- 六月一〇日　ヨハネス・プライシンガー　在大阪・神戸ドイツ連邦共和国総領事
- 六月一三日　フン・セン　カンボディア王国首相
- 六月一三日　アタンガナ・ザング　駐日カメルーン臨時代理大使

2001年1月から6月までに、新しくアドバイザリー・コミッティのアンバサダー・メンバーに就任された方々は以下の通りです。

- ジャーツィ・ポミャノフスキー　駐日ポーランド大使（2001年2月1日）
- ラフュー・バリー　駐日ギニア大使（2001年2月20日）
- サミール・ナウリ　駐日ヨルダン・ハシミテ王国大使（2001年3月12日）
- サー・スティーヴン・ゴマソール　駐日連合王国（イギリス）大使（2001年3月12日）
- ラシャド・ファラ　駐日ジブチ大使（2001年4月13日）
- ルイス・マキアベロ　駐日ペルー共和国大使（2001年4月23日）
- アール・アレクサンダー・カー　駐日ジャマイカ大使（2001年5月15日）
- カレル・ジェブラコフスキー　駐日チェコ共和国大使（2001年5月18日）

4/25　アール・アレクサンダー・カー駐日ジャマイカ大使

5/31　カレル・ジェブラコフスキー駐日チェコ共和国大使

フン・セン首相がAPUを来訪

六月十日（日）、カンボディア王国のフン・セン首相ご一行がAPUを訪問されました。訪問されたのは、フン・セン首相、ソク・アン官房長官、イン・キェット駐日特命全権大使、小川郷太郎駐カンボディア日本特命全権大使の方々です。

首相一行は、本部棟二階のコンベンションホールで、APU関係者および平松大分県知事と親しく懇談されました。

席上、学長がAPUに関して説明を行い、「カンボディアからの留学生は現在一名ですが、十月にはODA（政府開発援助）の支援で三名が入学予定です。カンボディアからもっと多くの留学生がAPUに入学されることを望みます。首相のご支援をお願いします」と申し上げました。首相は「もっと多くの学生がAPUに留学できるよう努力します」とお答えになり、さらに「新しい学部増設の予定はありますか」「入学者の年齢制限はありますか」などと質問され、APUに強い関心を示されました。また同席したカンボディア出身の学生テップ・ヴェスナー君に温かい励ましの言葉をかけられました。

左から3人目がフン・セン首相

順調に進む学生募集

◎全世界に拡がる入学者

二〇〇一年四月、国際学生は、編入学生も含めると三十四カ国・地域から二百五十五名が入学しました。これにより、ＡＰＵには五十一カ国・地域の国際学生が在籍することになりました。

ＡＰＵでは、二〇〇三年度までに五十カ国・地域から国際学生を受け入れるという目標をたてていましたが、それを開学二年目にして達成できたのは、まず何よりもアドバイザリー・コミッティを始めとする皆さまのご支援による「ＡＰＵ国際学生奨学金」のおかげであり、また来日したその日から住むことが可能な「ＡＰハウス」の設置や英語・日本語両用の教育システムなどによるものです。

また各国の駐日大使館のご協力により、母国の優秀な学生を推薦していただいたり、インターネットでＡＰＵを知り出願してきた学生も多くいました。

さらに二〇〇〇年に入学した在学生が夏休みや春休みに帰国した際に、大学案内やＡＰＵのプロモーションビデオを持って自分の母校の先生、友人や後輩にＡＰＵでの学習や生活を積極的にアピールしてくれ、ＡＰＵの評価を高め、広げるのに大きな役割を果たしてくれました。また、韓国、インドネシアを始めとした現地事務所やコーディネイターの方々の努力によりＡＰＵの知名度が急速に上がったことも志願者が増えた大きな要因の一つです。

二〇〇一年十月入学の志願者数は五十七カ国・地域から四百九十六名となり、これまでで最高の志願者数となっています。この中から選考され合格した学生二百数十名が入学してくると見込まれます。

これにより、学生の出身国・地域も中央アジア、ヨーロッパ、アフリカを中心に、さらに十程度増えることになります。

十月入学者の中には、カンボディアから三名、ラオスから三名の、日本政府ＯＤＡの留学生支援無償事業による留学生が含まれます。

これらの入学予定者の中には、各国・地域の進学校を卒業し、ＡＰＵを選択して入学してくる学生や、自国の有名大学から編入学してくる学生も多く、高い能力を持つ学生が増加しています。

これも開学以来、関係各機関のご協力をいただき、また在学生が帰国した際に母校で後輩に紹介することなどにより、ＡＰＵの存在が急速に浸透してきた結果であると考えています。

二〇〇二年度の国際学生募集については、より高いレベルの学生の受入れを目指して積極的な活動を展開していく予定です。

◎競争率が十倍を超える国内学生

二〇〇一年四月入学の一般入試は、志願者数四、五八九名で、昨年と比較して百六十六名増となり、昨年に引続き十倍を超える競争率となりました。

入学者を出身地域別で見ますと、九州・沖縄地区の出身者が約三割であり、七割は関東、関西を中心に全国から入学してきています。

予備校が発表する合格者のデータを見ましても、立命館大学と同レベルの受験生が入学していることが証明されています。

四月に実施した高校教員対象の説明会では、関東、関西の高等学校の教員も含めて約百名の教員が参加されました。このように国内の高等学校、予備校においても高い評価が定着してきています。

国内学生の十月入学者募集に向けて、英語と小論文を課す入試およびセミナー形式の入試を七月に実施しました。合格者を見ますと、多様な個性・能力を持った学生が入学してくる予定です。

さらに九月二十九日のＡＰＵセミナー方式入試を皮切りに、二〇〇二年四月入学の入試がスタートします。

APU学生は世界52カ国・地域から

国・地域別の学生数（2001年5月1日付）

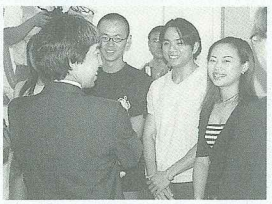
国・地域	1回生および2回生の総学生数	アジア太平洋学部	アジア太平洋マネジメント学部
オーストラリア	6	3	3
バングラデシュ	7	3	4
ブルガリア	5	2	3
カンボディア	1		1
カメルーン	1		1
カナダ	6	2	4
中国	123	35	88
クロアチア	1		1
ジブチ	1		1
エクアドル	1		1
エストニア	1		1
エチオピア	3	1	2
フィンランド	2	2	
ガーナ	5		5
ハンガリー	2	1	1
インド	23	10	13
インドネシア	34	14	20
イラン	1	1	

国・地域	1回生および2回生の総学生数	アジア太平洋学部	アジア太平洋マネジメント学部
日本（国内）	989	547	442
ヨルダン	1	1	
ケニア	6	4	2
韓国	188	97	91
ラオス	8	3	5
リトアニア	6	2	4
マダガスカル	1	1	
マレーシア	15	6	9
マリ	2		2
モンゴル	4	2	2
ミャンマー	9	3	6
ネパール	7	3	4
ニュージーランド	2	1	1
ナイジェリア	4	1	3
パキスタン	5		5
パプアニューギニア	2	1	1
ペルー	1	1	
フィリピン	8	5	3

国・地域	1回生および2回生の総学生数	アジア太平洋学部	アジア太平洋マネジメント学部
ポーランド	2	1	1
ルーマニア	1	1	
ロシア連邦	4		4
サモア	2	1	1
シンガポール	8	3	5
スリランカ	18	4	14
シリア	1	1	
台湾	37	20	17
タイ	26	10	16
トンガ	1		1
ウガンダ	1		1
イギリス	5	3	2
アメリカ合衆国	10	4	6
ベトナム	52	15	37
ザンビア	1	1	
ジンバブエ	2	1	1
合　計	1,652	817	835

高円宮殿下・妃殿下ご来学

七月五日（木）、高円宮殿下・妃殿下がＡＰＵをご視察されました。両殿下はご到着ののち本部棟四階の応接室で平松大分県知事、井上別府市長、三ヶ尻別府市議会議長、川本理事長、坂本学長、慈道副学長、伊藤副学長とご懇談されました。まず川本理事長が挨拶し、坂本学長がＡＰＵの概要説明を行いました。



懇談終了後、両殿下は坂本学長の先導でメディア・センターに移動され、アドバイザリー・コミッティライブラリーについての説明を受けられました。両殿下は、同ライブラリーに大きな関心を示され、たいへん有意義な取り組みと高く評価されました。また、言語ラウンジでは約二十人のＡＰＵの学生たちと英語でご懇談されました。両殿下は「どこの国のご出身ですか」「日本での生活はいかがですか」「将来の目標はどうされますか」などと学生一人ひとりにお声をかけられ、学生たちが歓声を上げる場面も見られました。

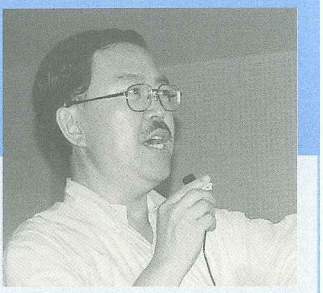
両殿下は最後に和心庵をご覧になられました。

●授業レポート（4）Corporate Strategy EA

「経営戦略論ＥＡ」

ＡＰＵでは、二回生になると専門教育科目を選択できます。専門教育科目の多くは、春セメスターに英語で開講されれば秋セメスターには日本語で開講されるなど、主言語がどちらであっても希望する科目を選択できるようになっています。今回は、英語で行われているアジア太平洋マネジメント学部の専門教育科目「経営戦略論ＥＡ」について、久原正治先生に話を伺いました。

経営戦略論



久原 正治 教授
くはら　まさはる

経営戦略論を教える立場として

経営戦略論はもともとアメリカでできた学問です。使用しているテキストはアメリカで出版されたものなので、あげられている事例は基本的にアメリカ企業のものです。ですから、私は日本の企業の事例をできるだけたくさん取り上げ、経営戦略の理論の何がそこで使われているかを授業で明らかにするようにしています。アメリカでできあがった理論をベースに、日本企業の経営の仕方を学んでもらうのが目的です。

世の中の情勢は常に動いており、経営戦略の分野でも、常に最新の情報が求められています。私は、大学で教える前は銀行に勤め、日本やアメリカの企業にアドバイスをする仕事をしていました。その経験からいろいろな事例を見聞してきましたが、現在でも外に出かけていって、できるだけ多くの日本の企業と付き合うように努力しています。企業の研修会などで講師を務め、現場の人々と議論することによって、こちらも学び、最新の現実の動きを知ることができます。このように、自分自身も現場主義の企業戦略学習を心がけています。

理論と現実を繋ぐ授業

私の授業では、前週のポイントをレビューした後、まずその日のテーマを話します。何を学ぶかが明らかなほうが、授業に取り組みやすいと思うからです。そして、学生がプレゼンテーションをし、それについての質疑応答のち、私が講義をするというスタイルです。講義に使うスライドは、テキスト付属のものを利用していますが、これを日本の実情に合うように修正して使っています。小テストも付録のＣＤ－ＲＯＭを利用することで、労力を省いています。アメリカの教材はよくできています。それでも、英語で授業するためには、一回の準備に丸一日かかりますが。

ほとんどの学生は、現実の企業のことを知りません。ですから、どうすれば理論と現実を繋ぐことができるかを考えて授業を進めるようにしています。理論だけ読んでもわかりませんから、わかりやすい事例を通じて理解させるために、グループによるプレゼンテーションをさせています。現在このクラスに登録している学生は六十二名（うち日本人学生は七名）ですが、全体をいくつかのグループに分け、セメスターの間に各グループが二回ずつ、ショートケースについての発表を行うことになっています。インターネットなどを使って下調べをし、グループで議論することによって、理論と現実との接点が理解してもらえると考えています。

プレゼンテーションの後、その日のテーマに関連する事例をできるだけ多

受講生の声

ダッタ シュウェタ
アジア太平洋マネジメント学部
2回生
●インド

今後マネジメントの勉強を続けるにあたり、すべてに関連する重要な科目なので「経営戦略論」を選択しました。この授業では、テキストを読むだけではなく、ケーススタディを通して理解を深め、戦略の適用の仕方を学ぶことができます。

プレゼンテーションの方法は、学生に任されています。理論は一つですが、各グループが自由に企業をピックアップし、工夫して発表しています。グループのメンバーは多国籍で、それぞれワークスタイルが違いますが、将来国際社会に出れば自分とは価値観の異なる人々と働くのですから、予行練習になります。

ＡＰＵに来る前は、世界中から来た学生が一緒に勉強するなんて不可能だと思っていましたが、来てみると、それほど難しいことではないと思うようになりました。学生は、各々が一つの国や地域を代表しています。私も、インドから来た学生の一人として誇りを持って学生生活を送っています。

将来は、マーケティングのＭＢＡを取得するために修士課程に進むか、またはしばらく日本の企業で働きたいと考えています。

く示して、学生が知らない企業がどういうものかを説明するようにしています。もちろん、コカ・コーラなど、大部分の学生が知っている企業もあります。そういう場合は、さまざまな国・地域からきた学生にそれぞれの国・地域での事例を聞くことができるので、おもしろいですね。また、グループを組むことによって、まとまりがでてきているようです。プレゼンテーションの評価は成績の二割を占めるのですが、インセンティブを明確にすると、学生たちはがんばるようです。教室の最新設備を最大限に利用して、すばらしいプレゼンテーションをするプロ級のグループもいますよ。学生に学ぶところが大です。

現在の課題

もちろん、問題点もあります。まず、学生間の英語力の差です。英語を母国語とする学生もいますが、多くの学生は専門の授業についていくためには、もう少しアカデミックな英語の勉強を続ける必要があると思います。次に、社会的背景の違いです。出身国・地域によっては、企業という概念がわからない学生もいます。そうすると、授業の理解の度合いが違ってきます。三つめは、系統的な履修の問題とも言えますが、経営戦略論を学ぶために必要な、経済学などの基礎知識を持っていない学生がいるということです。働いた経験や、勉強した経験のある学生であれば問題ありませんが、基本的な理論を学んでおかないと、専門科目の理解は難しいと思います。

私としては、学生の声を聞いて学生がどれだけ理解しているかを知り、もっと理解が深まるにはどうしたらよいかと考えながら双方向で授業を進めていきたいのですが、これがいちばん難しい。私の能力の限界もあるのですが、双方向でするには週一回九十五分の授業では短いと感じます。できるだけ発表も質問もさせて、もちろん講義もするためには、週二回くらい時間があるといいですね。

学生の理解を高めるために

学生の理解度は、セメスター中に三回提出させるレポートに表れます。まだセメスター半ばなので断定的には言えませんが、これまで提出されたレポートの出来は必ずしも良くありません。レファレンスはインターネットだけという学生が多いのですが、やはり本をきちんと読んでほしいですね。学生の能力そのものは決して低くはないので、今後の「伸び」に期待したいと思います。

次のレポートは、ハーバードビジネスレビューの論文を読み、要旨をまとめたうえで各国においてその理論にあてはまる事例を探し、理論に基づいて自分なりの分析を書くというものです。理論的に自分の考えを展開することが求められます。

日本人学生が経営の専門分野の理解力をつけるためには、一方では概念を日本語できちんと勉強し、他方では英語で専門書を読解する訓練をするといいと思います。また、多少時間割に余裕をとって、数学や統計学など基礎になるものを勉強しておくべきです。基礎ができていれば論理的に考える力がつき、専門分野の理解も進むはずです。プレゼンテーションの仕方も一回生のときから練習しておくべきでしょう。教えるほうが英語が母国語でなく、教えられるほうのほとんども、英語が母国語ではないのですから、英語を使って勉強するというのは難しいものです。

もちろん、非常に優秀な学生も相当数いますから、そういった学生はさらに上のレベルをめざしたらいいでしょう。一つのクラスで教えるときには、英語と基礎知識についてある程度のレベルはそろえるべきだと思います。

最終的には、基本的なコンセプトの理解を通じて、企業が取る具体的な戦略の適否を判断できるようになってほしいと思っており、私も学生に学んでいきたいと考えています。

受講生の声

カズィ ラーマン
アジア太平洋マネジメント学部
2回生
●バングラデシュ

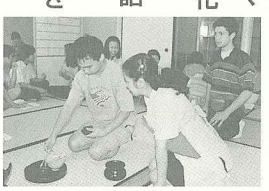
この授業では、国際市場で成功していくために必要な企業戦略について学ぶことができます。各企業が他の企業より優位に立つために独自の戦略を展開していることがよくわかります。久原先生はアメリカと日本においてたくさんの経験を持っておられ、そのお話はたいへん参考になります。英語が上手ですし、ジョークを交えて話してくださるので、楽しいクラスです。

プレゼンテーションでは、実際に企業がとっている戦略を取り上げて、その理由や効果について発表を行います。私たちのグループでは、ダイムラー社とクライスラー社の合併について扱いました。レポート課題の出し方は、先生の経験を感じさせるものでした。初めてレポートを課されたとき、基本を本当に理解していないと書けないものだとわかりました。幸い最初のレポートはAと評価されました。私はもともと物理、化学、数学が得意なので、それらに関連するファイナンスとアカウンティングを専攻するつもりです。将来は、日本かアメリカの金融機関で働きたいと考えています。

「特殊講義ＥＡ（アジア太平洋地域理解科目）」

Special Lecture EA (Foundation for Asia Pacific Studies)

茶道裏千家家元千宗室氏から寄贈いただいた茶室「和心庵」では、「アジア太平洋地域理解」の一環として、日本を代表する伝統文化の一つである茶道の授業が行われています。京都・裏千家淡交会総本部から派遣された、英語・日本語・タイ語に堪能な講師 鳥谷ポンパンさんが担当しています。茶道が育てた文化の総合性を、理論と実践を併用しながら実感できる授業になっています。



特殊講義（茶道）

鳥谷 ポンパン 非常勤講師
とりたに

日本の伝統文化

この授業の特徴は、タイ人である私が京都・裏千家今日庵で学んだ経験をもとに、国際学生そして国内学生にも、裏千家茶道のすばらしさを伝えることにあります。

授業は週一回、裏千家千宗室御家元様がＡＰＵに寄贈された「和心庵」にて、学生定員二十名で行われています。

裏千家茶道の基本的コンセプトをひとことで言えば、「一期一会」ということだと思います。二度とはないお客様と亭主との出会いのために、一服のお茶が呈される、そのひとときのためにすべては捧げられています。そこには日本の伝統文化の粋が凝集しています。茶葉、茶器はもとより、花器、什器、軸、畳、襖、障子、そして炭に至るまで、すべてに日本の歴史と文化が映し出されています。これらを統合する文化体系として、裏千家茶道はあります。

もちろん、ほとんどの国際学生にとって、こういった日本の伝統文化にふれるのは初めてのことです。彼らにとっては、最初、奇異に感じることもあるようです。しかし、お茶を点てる際の無駄を排した所作と、凛とした雰囲気の中でいただく一服のお茶に、いつしか日本文化と茶道に大きな興味を抱いているようです。

英語で説明

授業は英語で行われています。タイの学生にはタイ語で話すこともあります。毎回の授業では、季節の茶花と茶菓子も用意し、四季折々の話題にも触れながら、日本文化について説明しています。

茶道の精神的背景といいますと、禅の心や武士道にまでさかのぼって説明しなければなりません。しかしこの授業では、茶道が育んだ日本文化の総合性をできるだけ実体験できるように心がけています。授業は、茶道の歴史や精神の説明から始まり、お茶室での作法（割り稽古）、お茶の基本的な点て方（盆略点前）について実践を交えながら進めていきます。

現在はお茶を頂く練習をしていますが、たとえば、お茶を出されて「お点前頂戴いたします」と言う前に、隣を向いて「お先に」「お相伴いたします」と言うその心を説明します。お茶碗の持ち方一つにしても、運ぶときと回すときとではなぜ持ち方を変えるのかを説明すると、納得するようです。

十五回の授業が終了するころには、各人が薄茶を点てられることを目標にしています。

現在クラスには、国際学生十四名と国内学生六名が出席しています。とはいえ、茶室では国籍は関係ありません。全員が茶人としてふるまうように言っています。ただ、茶室では正座がルールですから、学生にとっては少したいへんかもしれません。

お茶の味は案外国際学生にも好評なようです。ある韓国の学生は、「韓国にもグリーンティーがあるから、初めて飲んだときも大丈夫でした。味は好きです。そして、お菓子がとてもおいしいです」と言っていました。

お茶の心を理解して

裏千家の御家元様のことばに、"Peace in a Bowl of Tea."というものがあります。私自身このことばを大切にしています。ですから、授業に出席した学生にも一服のお茶で心穏やかなひとときを過ごしてもらえたら、と思っています。実際、学生が自らお茶を点て、お互いにお茶を呈するようになるころには、お茶を通じて心は一つとなり、和やかな人と人との関係ができあがっているようです。

学生の声

チュア チン ハオ
アジア太平洋マネジメント学部
2回生
●シンガポール

昨年この科目を履修したのですが、もっとお茶のことを知りたいと思い、今セメスターは先生の助手をしています。授業の前にお道具の準備をしながら、先生にいろんなことを教えていただいています。和心庵はすばらしいお茶室です。最初はお点前をするのにルールや手順が多くて面倒だと思ったのですが、練習するうちに他人に配慮するお茶の心がわかるようになりました。一服のお茶には点てた人のスピリットが入っていると思います。できればいつか、短期間でもいいから裏千家に入って経験を積みたいです。

学術レポート

RCAPSセミナー

RCAPS（立命館アジア太平洋研究センター）では学内・学外の研究者を講師に迎えた研究会：RCAPSセミナーを開催しています。二〇〇一年度においては、他大学等から著名な研究者をお招きし、アジア太平洋地域の話題について講義していただく「Contemporary Asia Pacific Seminars」と、APUの教員が各自の研究内容について講義する「Current Research Seminar Series」の二つのセミナーが企画されています。今回はこれまでに開催したセミナーの一部をご紹介します。

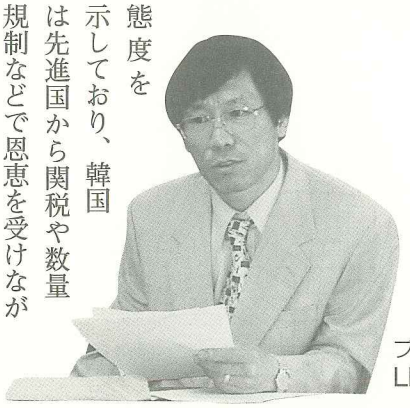
Contemporary Asia Pacific Seminars #1

Necessity of Comparative Studies on Trade Barriers between Korea and Japan

二〇〇一年五月二十九日、プサン大学からLEE Eun Sup教授を迎え、「Necessity of Comparative Studies on Trade Barriers between Korea and Japan」と題した第一回目のセミナーを開催しました。LEE教授は既に昨年からAPUアジア太平洋マネジメント学部の横山研治教授と日韓の貿易障壁に関する共同研究を進めており、その中間発表の場として今回のセミナーが開催されました。

共同研究では、日本と韓国の貿易協定および近隣諸国との友好的貿易関係を構築することを目的とし、基礎的資料となる両国の貿易障壁の実態についての調査が行われてきました。今回のセミナーでは、韓国における貿易障壁に関する調査結果の報告がありました。以下に講演内容の一部をご紹介します。

まず、GATT体制のなかで五十年あまり主導的役割を果たしてきた先進国は、この期間、韓国を始めとした開発途上国には比較的寛大な態度を示しており、韓国は先進国から関税や数量規制などで恩恵を受けながら輸出拡大を図ってきた。しかし、WTO体制下では加盟国は自国の利益を追求し、韓国は今まで受けてきた恩恵を受けられない状況になっている。



プサン大学
LEE Eun Sup教授

一方、このようなWTO体制が韓国の経済に与える長期的影響として、世界的自由貿易の発展による韓国からの輸出の拡大、双務的通商過程で起こりうる通商摩擦の緩和などがあげられる。またWTO体制下では、原則として、WTO協定に違反した国内法は制定できないため、韓国は自国の法令・制度・慣習を国際基準に合わせるように要求されていること、したがって、韓国の対外貿易法や関税法など貿易関連の法令は、WTOの規範から外れるわけにはいかない現状にある。

報告後、活発な議論が行われました。質問は、韓国の対日貿易規制や今後の動向および予想される日韓の自由貿易協定の問題に集中しました。特に、二国間に自由貿易協定が指向される必然性と、日韓で締結された際の近隣国への影響については、大変白熱した議論が展開されました。

RCAPS運営委員会のメンバー

研究能力の限界年齢意識

二〇〇一年五月二十三日、APU教員による第一回目のCurrent Research Seminar Seriesが開催されました。アジア太平洋マネジメント学部の福谷正信教授による「研究能力の限界年齢意識」をテーマにしたセミナーには、多数の参加がありました。

日本では研究者の研究能力の限界年齢意識が強く、加齢にともなう能力の限界意識を理由に、企業の研究所員の平均年齢は三十歳、システム開発技術者の定年は三十五歳とも言われています。日本人はなぜ特定年齢で能力限界を意識するのでしょうか。今後、日本では少子高齢化が進行するなかで、企業は従来のように、ピラミッド型の人員構成を堅持できなくなってきています。こうした問題意識のもと、福谷教授らが行った「研究者の能力限界意識に関する国際比較調査」のデータに基づいた分析結果を中心に報告が行われました。以下に報告の一部をご紹介します。

一九八八～九〇年に我々が行った、「研究者の能力限界意識に関する国際比較調査」によると、欧米では研究者の能力限界は個人差の問題であった。しかし、日本の研究者は「四十歳前後」を能力の限界年齢と意識している。この理由を検証するためさらに一九九七～九八年に同種調査を実施した結果、日本固有の年功序列型人事制度、すなわち研究者も加齢とともに昇進し、管理職に就くため、中高年研究者は特定年齢で研究の第一線から離脱するという管理職昇進制度がその要因となっていることが有力視された。したがって日本では、研究者のインセンティブ施策として管理職昇進が有効に機能してきた。しかし、高齢化の進展で、それが困難となった。

次に研究者の能力限界事由を集計した結果、各国共通項目は管理的業務の多忙と研究活動以外の仕事による多忙である。能力限界事由は創造力の欠如や挑戦意欲の衰退ではなかった。特に日本は管理的業務の多忙意識が、他国と比較し、際立って強かった。このことから、日本では研究者を研究専門職として研究業務に専念できるシステムを設計することが必要だといえる。

最後に調査結果を時系列に比較すると、日本の研究者の能力限界年齢意識は、「個人差」という認識が強まったことを指摘できる。加齢による能力限界意識は減少してきたのである。生涯現役のキャリア形成を視野に入れた人事施策の検討が求められる。

報告に引き続き、国際化の進展を背景に、日本のマネジメントシステムのあり方をめぐる議論が展開されました。特に人事制度とその運用、リーダーシップ発揮の条件、インセンティブとモチベーション、社会慣習と経営文化など、自由闊達な意見交換が行われました。

アジア太平洋マネジメント学部
福谷正信教授

Current Research Seminar Series

●第1回
5月23日（水）
福谷 正信 教授（APM）
研究能力の限界年齢意識

●第2回
6月6日（水）
EADES, Jeremy S. 教授（APS）
Images of Taiwanese Aborigines: 1600 - 2000

●第3回
6月27日（水）
久原 正治 教授（APM）
Business School - What's all about it? Is an Asian-style business School possible?

●第4回
7月11日（水）
汪 正仁 教授（APM）
The Rise of Container Transportation in East Asia

●第5回
7月25日（水）
石井 由香 助教授（APS）
シンガポールのフィリピン人コミュニティ

Contemporary Asia Pacific Seminars

●第1回
5月29日（火）
プサン大学（韓国）LEE Eun Sup 教授
Necessity of Comparative Studies on Trade Barriers between Korea and Japan

●第2回
7月4日（水）
早稲田大学 林 華生 教授
Japan's Economic Performance and Asia's Revitalization

series キャリア開発ゼミナール

Career Development Seminar

APUには、正規の授業、公式に登録されたサークル活動のほかに、自主的にさまざまな活動を行うキャリア開発ゼミナールがあります。今回は、アジア太平洋学部の小方昌勝教授が主宰する「ツーリズムを考える会」と、橋本秀一教授が主宰する「橋本マスコミ塾」を紹介いたします。

◎ツーリズムを考える会

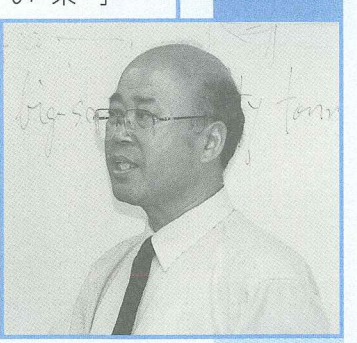
ツーリズムを学ぶために入学し、すぐにでも勉強を始めたいという学生のために、開学直後の二〇〇〇年六月に作られたのが「ツーリズムを考える会」です。国内・国際学生合わせて、現在では約五十名が登録しています。

勉強会は週一回、二時間行われ、最初の一時間は、世界観光機関（WTO）発行の人材教育テキスト（英文）を使用して理論を学びます。後半は、インターネットからダウンロードした時事問題で、ケーススタディを行います。この日は、ロンドン「エコノミスト」誌から抜粋した記事で、イギリスで発生した口蹄疫がイギリス国内の農業や旅行業に与える影響について考えました。

英語の観光・旅行業界の専門用語が次々と出てきますが、先生は英語と日本語の両方で解説されます。「国内・国際学生の双方にとって、将来必ず役に立つと思っています」と先生はおっしゃいます。

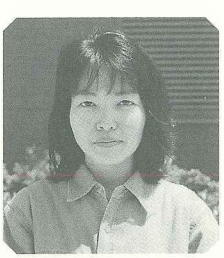
これまでの活動内容の中には、昨年九月から作成を始めた別府市訪問外国人旅行者の統計があります。これは、地元で検討されながらも企業間の抱える問題から実現されていなかったものです。そこで中立的な立場の先生が、市内の宿泊施設から提供された情報を集計・分析して、一カ月の統計を翌月末に発表しています。この四月には「別府市外国人統計タスクフォース」を募ったところ、二十名ほどの学生が参加し、現在実施方法を検討中とのこと。「いずれは学生たちにコンピュータによる分析にも関わってほしいと考えています。こうした実務経験は社会に出たときに確実に役立ちますから。」

先日は、日本港湾協会機関紙のための、「『青き伝説の別府湾』ベイフロントの再生と提言」というテーマの座談会に、先生と学生が一緒に参加



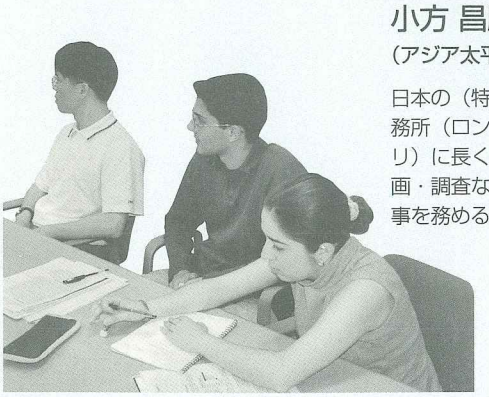
小方 昌勝
（アジア太平洋学部教授）

日本の（特）国際観光振興会の海外事務所（ロンドン、フランクフルト、パリ）に長く駐在。日本の海外宣伝や企画・調査などを担当。1999年まで理事を務める。



末吉みか子
アジア太平洋学部
1回生

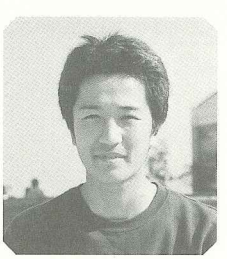
私は専門分野として環境を選択するつもりなのですが、ツーリズムも勉強したいと思ってこのゼミに参加しました。異文化に触れるのが楽しくてアジアや中近東を旅行しているときに、国際協力に関心を持つようになりました。中でもケニアで孤児や環境改善のために活躍する日本人女性の姿に感動して、国際協力事業に貢献したいと思うようになりました。現在はガーナの学校に図書館を作るため、本を送る活動を個人で続けています。組織立った効率的な活動方法を大学で研究したいですね。このゼミでは先生が英語と日本語で解説してくださるので、たいへん勉強になります。三重町のグループに参加して資料の研究を進めているところなので、これからが楽しみです。



しました。「学生から活発な意見が出ることに、担当の別府市の方が驚いていたようでした（笑）。」この夏には（財）日航財団が主宰する「二〇〇一アジアフォーラムin大分」にも学生が参画する予定です。

APUは、今年三月に大分県三重町と友好協定を締結しましたが、三重町の「ツーリズム振興」をこの会が研究することに決定しました。会のなかに担当グループをつくり、現在三重町の資料や計画書を研究しています。近く「第一次三重町観光振興への提言」および「研究報告素案」を提示する予定です。

今後は、三重町に次いで、一年に一市町村を研究・分析することを考えています。日本の政府観光機関の海外事務所で長くこうした研究に携わってきた小方先生の経験が活かされることでしょう。「できれば国内か海外の機関や大学を訪れて、意見交換や協議を行いたいですし、ツーリズム関連の古典書の講読や、業界の人々との交流も実現させたいですね。最終的には、会のホームページを立ち上げたり、学生が作成した論文や報告書を作成して配付するなど、会の研究成果を外へも発信していきたいと考えています。」



片岡 肇
アジア太平洋学部
2回生

入学前に読んだAPUのパンフレットに書かれていた先生の言葉にたいへん共感し、ぜひ先生のもとで、アジア太平洋の観光について学びたいと思っていました。入学後、このようなゼミを開くことを先生から聞き、先生の指導を受けられるいいチャンスだと思って参加しました。

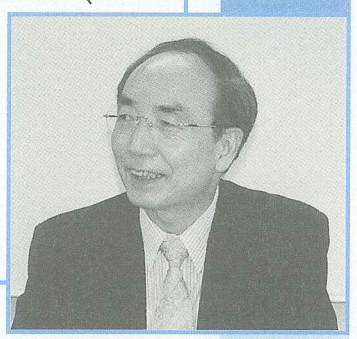
毎回、世界各地域での観光全般の記事を英訳しながら、ディスカッション形式で進めていきます。英文の中には観光の専門用語などが頻繁に出てきますが、先生がその都度かみ砕いて説明をしてくださいます。将来、旅行代理店で働きたいと思っている私には、最新の観光専門用語を学ぶ機会なので、有意義だと感じています。今後は、フィールドワークなどによってどんどん実際の観光というものに触れる機会を持ちたいと思っています。

◎橋本マスコミ塾

就職試験の実施時期が特に早いと言われているマスコミ業界を目指す学生を集めて、実践的なマスコミ受験対策を指導するのが「橋本マスコミ塾」です。なんとしてもマスコミに就職したいという強い意欲を持ち、すでにそれなりの準備をしている学生を対象に、今年四月に開かれました。

同塾では、元NHK記者の橋本先生が、取材のイロハからマスコミ倫理、敬語の使い方を含めた正しい会話、時事（常識）問題の勉強の仕方、面接にのぞむ心得、文章（論文）の書き方などを指導します。

参加希望者は、課題①「えひめ丸」についての論文と、課題②志望理由「なぜ、あなたはマスコミを目指そうとしているのか」を提出し、選考によって受講者が決定されました。申込者

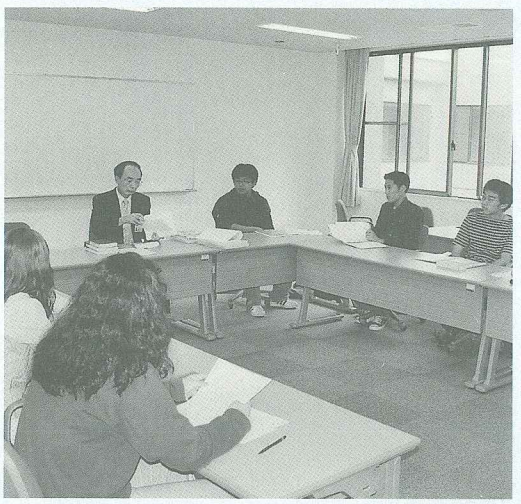


橋本 秀一
（アジア太平洋学部教授）

1963年から1999年まで、NHKの経済部記者、ジャカルタ支局長、外信デスク、衛星中継デスク、放送文化研究所主任研究員などを務める。

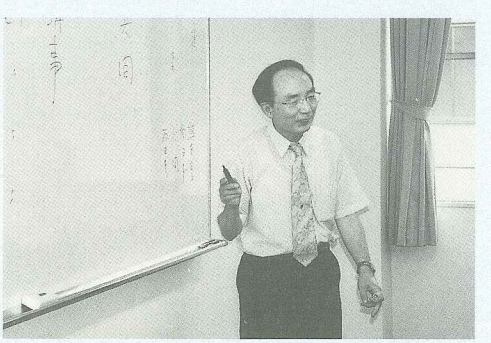
二十名のうち、合格は十三名で、現在は十名ほどが毎週行われるこの講座に出席しています。

この日はまず、宿題として出されていたマスコミ各社入社試験の過去問題を扱いました。解答を合わせる途中で、「ら」抜きことばや、司馬遼太郎と藤沢周平の違いなどについて随所で先生がエピソードを紹介します。その後は、通信社の役割について、講義が行われました。現場を体験してきた先生ならではの話は、どこでも聞けるものではありません。首都圏とは違い、地方に在住していると、実際に新聞社や放送社を訪問する機会はあまりないため、学生にとって、この塾は情報の宝箱のようなものです。



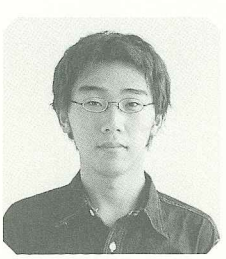
毎週出される宿題は、ほかにも、テーマを設定しての論文があります。ワープロに慣れた学生に、あえて原稿用紙に手書きさせています。「国際大学だから英語さえできればいい、ということはありません。日本人であれば、日本語より英語がうまくなることはないのです。まず、日本語能力が高いことが絶対条件です」

「学生たちの文章力はまだまだです。読み手を意識して書いてほしいですね。しかし、練習によって能力は伸びるものですから」と先生はおっしゃいます。「なかなかいい感性を持っている学生もいますよ。テーマによってはおもしろいものを書いてきます。さらに上達するには、日ごろからあらゆるものに関心を持つようにしてほしいと思います。」



この業界で求められるのは、いろいろなことに興味・関心があり、何にでも食いついていく人、人と会って話をしたり聞いたりするのが好きな人、フットワークの軽い人、そして誠実さが感じられる人だといいます。「相手から信用されないと、話は聞けませんから。」

世の中のために情報を伝えていくという使命を持つという意味では、マスコミ職は聖職ともいえる、という考えを持っていらっしゃる先生は、最後に学生に向けてこのメッセージを。「しがみついてでもこの道を行くのだ、という覚悟で取り組んでいってほしいですね。」



三輪 喜則
アジア太平洋学部
2回生

毎回1000字の論文、マスコミ関係の会社の入試過去問題など課題は多いですが、情報を送り出す側としての心構えや就職試験の勉強方法を、最近までマスコミの最前線にいらっしゃった先生に直接指導していただけるので、毎週ゼミがある日を心待ちにしています。この橋本マスコミ塾で得たものを活かし、将来必ず報道記者になりたいと思っています。

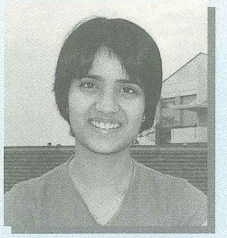
新留 ひとみ
アジア太平洋学部
2回生

ほぼ毎週出される論文の課題のためか、「考える」ことが多くなりました。課題では戸惑うテーマも少なくなく、頭を悩ませることも度々です。しかし、論文を皆の前で読み、橋本先生の厳しい批評を頂くことで、自分の文章の欠点に気付くようになりました。この塾に参加することで、私の就職に対する意識も変わった気がします。報道の仕事に就くという夢を実現できるように、これからもこのマスコミ塾に真剣に取り組んでいきたいです。

◆◆◆ 奨学金へのお礼の言葉

◆安藤百福名誉博士奨学金 ANDO Momofuku Scholarship

日清食品株式会社代表取締役会長である安藤百福立命館大学名誉博士からのご厚意により設置された「安藤百福名誉博士奨学金」は、在学中の学業成績が優秀で人格形成にすぐれ、諸活動においてもリーダーとして顕著な成果を修めた者に対し、支援と奨励を行うことを目的としてします。同奨学金の初めての対象者（二回生一名）が決定し、六月二十六日に表彰されました。



シュラダ チョドリ

アジア太平洋学部
2回生
（インド）

ＡＰＵの学生の中からただ一人選ばれて、安藤百福奨学金を受けることをたいへん誇りに思っています。この機会に、安藤先生、立命館アジア太平洋大学、先生方、友達、そして故郷にいる私の家族と私を応援してくださる方々に、感謝申し上げたいと思います。みなさまのサポートと励ましがなければ、このようなことは不可能だったでしょう。

この奨学金の最初の受給者として、多大なる責任を感じています。ＡＰＵ学生の代表としての期待に応えるために、そして私自身のみならず、ＡＰＵとアジア太平洋地域のよりよい未来を築くために、努力を続けていく所存です。

世界に認められる大学になるためには、しっかりした研究活動の基盤が必要です。私は、参加する活動すべてに全力を注ぐことで、大学の評価向上に少しでも貢献できればと考えています。また、学業のみならず、一見重要ではないように見える些細な活動が、新しい大学の未来と歴史を創りあげていくのだと考えています。

私の夢は、アジア太平洋地域の繁栄をこの目で見ることです。いただいた奨学金は、この地域が二十一世紀において直面する問題をよりよく理解するために利用したいと思っています。ＡＰＵでの四年間と、さらなる高等教育を通して得られる知識を携えて、私は国連に入り、アジア太平洋地域の専門家になりたいと思っています。

グローバル化しつつある世界において、自分自身の居場所を見つけられるよう、大学がこれからもサポートしてくれることを願っています。このような名誉ある奨学金をくださったことに、重ねてお礼を申し上げます。みなさまの大きな期待に添い、できればそれ以上の結果を出せるように努力していきたいと思っています。

◆ＡＰＵ国際学生奨学金 APU Scholarship Program

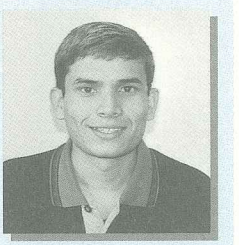
ＡＰＵ設置の趣旨に賛同いただいたアドバイザリー・コミッティやサポーティング・グループ企業をはじめとする数多くの方々の寄付により、国際学生の人材育成を通じて、民間レベルでの国際貢献を行うことを目的に設置されたのが、ＡＰＵ国際学生奨学金制度です。出身国・地域の経済事情、学生個人の学力、勉学意欲などを総合的に判断して選考された国際学生による、感謝の手紙の一部をご紹介します。

何 佳

アジア太平洋
マネジメント学部
1回生
(中国)

中国には「水を飲むとき、井戸を掘った人を忘れず」という諺があります。ＡＰＵ国際学生奨学金をいただいている留学生として、奨学金を提供してくださっているＡＣメンバーの方々に、心から感謝したいと思います。

私は二〇〇〇年秋に入学した中国からの留学生で、何佳（ヘ・ジャ）と申します。現在ＡＰＵのアジア太平洋マネジメント学部で勉強しております。中国では、吉林省にある長春外国語学校で六年間日本語を勉強しており、中学二年生のときから、日本に留学するという決意がありました。一生懸命に勉強した甲斐があって、高校卒業と同時に、ＡＰＵに入学することができました。もっともうれしかったのは、ＡＰＵ国際学生奨学金がもらえたということです。しかし、「得意のあまり、有頂天になる」という言葉があります、うれしいより、自慢より、今の私にとって一番重要なのはやはり勉強なのです。そして、ほかの学生よりも、もっともっと努力しなければならないと思っております。ＡＰＵで勉強して、今月で九カ月目になりました。勉強はとても忙しくて、毎日充実しております。中国の学校で英語を勉強したことはありませんでしたから、今、英語能力を高めるために、一生懸命に勉強しております。これからも、自信を持って元気いっぱいがんばっていきたいと思っています。



マイナリ マノジュ カンタ

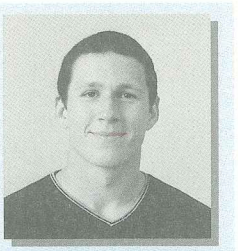
アジア太平洋学部
1回生
(ネパール)

私はネパールのカトマンズから来たアジア太平洋学部の一回生です。ネパールの教育省の協力を得てＡＰＵに入学することができました。

日本に来て八カ月が過ぎようとしていますが、ここでの生活は日々充実してきています。最初は、他の学生と同じようにホームシックになりましたが、キャンパスでの活動や、ホームステイ、地域の人々との異文化交流などを通じて、すぐに生活に慣れました。私はいつも、さまざまな背景を持つ人々がライバルでもあり、親しい友達同士でもあるという環境にあこがれていました。ＡＰＵは私のように何事にも熱心に取り組む学生に最適な環境だと思いました。自国よりはるかに物価が高い国に来て勉強を続けるのはたいへんなことですが、ＡＰＵ国際学生奨学金を受給できたことで、お金の心配をせずに勉強に専念できています。このような機会を与えてくださったＡＰＵの協力者の方々に、心から感謝を申し上げたいと思います。

当初は日本語が理解できなかったため日常生活で苦労しましたが、日本語クラスが始まって、その悩みからも開放されました。全体的に、ＡＰＵは温かい雰囲気で、楽しく暮らしています。

最後に、ＡＰＵの協力者の方々に再度お礼申し上げます。ＡＰＵを代表する学生の一人として、奨学金を最大限有効に利用していきたいと思っています。



サウリウス バラウスカス

アジア太平洋
マネジメント学部
1回生
(リトアニア)

この機会に、大学と奨学金を提供してくださっているＡＣの方々に感謝を述べさせていただきます。他の国際学生と同様に、私も財政的な問題から日本で勉強することなど到底無理だと考えていました。しかし、奨学金をいただけることになったため、日本で学位取得のための勉強ができることになりました。

現在私はいくつかの科目を履修していますが、どれもやりがいがあり、学ぶことを楽しんでいます。さまざまな国・地域から来られた先生方の視点を通して物事を見ると、これまで明白だと思っていたことに、新しい側面が見えてきます。

勉強以外では、ＡＰＵの友達と交流することを楽しんでいます。友達の多くも私と同様で、奨学金を受けて勉強するチャンスを与えられて日本に来ており、みな同じように感謝の念を持っています。

生活費を全額支給していただいているおかげで、勉強に専念できています。これは、ファイナンスの分野で修士号の取得を目指している私にとっては重要なことです。奨学金をいただくことへの感謝の気持ちとして、今後も一生懸命努力していくつもりです。

TOPICS on APU

「APハウス2」（学生用居住施設）起工式

二〇〇一年一月二十日（土）、APUのキャンパス内においてAPハウス2新築工事起工式が執り行われました。式には、川本八郎立命館理事長、坂本和一APU学長をはじめ、設計監理の株式会社山下設計、施工者の熊谷組・梅林建設共同企業体などの工事関係者、大分県および別府市からの来賓、地元関係者などおよそ四十名が参加して、工事の無事を祈願しました。

また、五月十五日には、モデルルームの見学会が行われました。

新しい建物はAPハウス1の隣接地に建設されるもので、五階建て一部三階建て、鉄筋コンクリート造り、延べ床面積一四、〇九四平方メートルで、学生用居室五百八室のほか、共同キッチン、ダイニングルーム、ラウンジ、シャワー室、インターネットルームなどを収容します。

APハウス2は、国際学生の受け入れが順調に進む中、今後に期待される短期留学生や編入学生の入居、さらに日本人学生と国際学生の交流、上級生の継続居住に対応するために建築されるものです。今年九月末までに竣工し、十月入学者の入居が可能になる予定です。

TOPICS on APU

椎名武雄氏とAPU学生の座談会

三月二十三日（金）に日本アイ・ビー・エム東京本社にて椎名武雄最高顧問とAPU学生五名との座談会が行われました。

この一月に「トップ講演会」の講師として椎名氏にはAPUにお越しいただき、「異文化との共生～日本アイ・ビーエムの歴史から～」というテーマで英語による講演を行っていただきました。

この講演を聴講した学生から、「ぜひ椎名先生と話がしたい」という希望が出て、その声に応えていただくかたちでこの座談会が実現しました。

椎名氏はまずAPUを訪問した時の好印象について語られ、次に一九五〇年代にアメリカに留学した経験から学んだことは、「グローバリゼーションのためには多くの国と接触することと同時に自分自身のアイデンティティを忘れないことが重要である」と話されました。また「学生時代に問題解決能力を身につけることが大事である」「ITにより世界の情報格差は縮小する」など一時間に渡り学生の質問に丁寧に答えてくださいました。最後に「将来の目標を実現するチャレンジ精神を大切に」と励ましの言葉をいただき、座談会は終了しました。なお、この座談会はすべて英語で行われました。

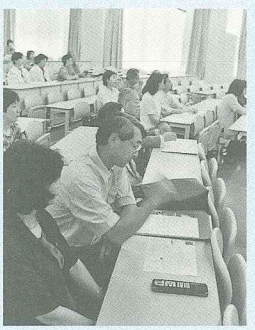
TOPICS on APU

APUホスト・ファミリーの会を開催

五月二十日（日）に「ホスト・ファミリーの会」をAPUにおいて開催しました。本会を発足させるとともに、APUからのホームステイプログラムの現状の説明、ホスト・ファミリー同士の受入れ経験の交流を行うことを目的として実施されたものです。七十名以上の参加により活発な意見交換が行われ、非常に有意義なものとなりました。

現在、APUに登録していただいているホスト・ファミリーは約二百二十軒で、週末や長期休暇に、本学の国際学生がホームステイやホームビジットをする際にご支援・ご協力を得ています。

参加者からは、「留学生からの要望をファミリーだけで受け止めるのではなく、大学も一緒になって考えてくれる機会を持てて良かった」「学生からの意見発表を興味深く聞かせていただいた」などの感想や、「ファミリーの登録数を増やしてほしい」「会の横のつながりを持ちたい」といった要望を寄せていただきました。



当日はAPU Spring Festival 2001の開催にあわせて行われたため、本会の終了後、参加者は受入れ経験のある学生と一緒に国際色豊かな文化行事にも触れるなどして、APUでの一時を満喫していただきました。

TOPICS on APU

APUスプリングフェスティバルを開催

五月二十日（日）、APUキャンパス内においてSpring Festival 2001が開催され、APU学生・教職員と市民合わせて約六、三〇〇人が参加しました。新入生も参加して四月初めに組織された実行委員会が中心となり、準備を進めてきました。

学内の各施設ではさまざまな催しが行われ、特に模擬店には、各国の珍しい料理を目当てにたくさんの人々が詰め掛けました。メインステージでは、バンド演奏や民族舞踊、またAPU神楽社による庄内神楽が披露され、会場は大いに盛り上がりました。午後からはミレニアムホールで、オーケストラやピアノ演奏など、音楽系の各サークルが日頃の練習の成果を発表し、訪れた観客を魅了しました。

またスチューデントホールでは、大分の学園祭では初めての試みである「ノーマン・ロックウェル絵画展」が四日間の日程で行われました。この展示会で販売されたポストカードなどの売上げの一部は、別府市内の養護学校に寄付されることになっています。

春の学園祭は今回が初めてでしたが、今後も一般市民の方が気軽に参加できるような楽しいイベントを企画していく予定です。

発行：立命館アジア太平洋大学
〒874-8577 大分県別府市十文字原1ー1
TEL. 0977-78-1114